HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シベ語の三つの動詞完了形 -Xei, -Xeŋe, -Xeの機能と節の階層 : なぜ -Xeのみが連体用法を持つのか?
Author(s)	児倉, 徳和
Citation	北方言語研究, 3, 155-174
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52607
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_KOGURA.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 3:155-174（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2013）

シベ語の三つの動詞完了形 -Xei, -Xeŋe, -Xe の機能と節の階層
―なぜ -Xe のみが連体用法を持つのか？―

児 倉　徳 和
（日本学術振興会特別研究員 PD）

1. はじめに

本論文の目的は、シベ語[1]の動詞完了形のうち、名詞修飾が可能な形式の位置付けを論じることにある。シベ語の動詞完了形には表 1 のように主節末に立つ場合に i 形（-Xei / -Xaqui）、ŋe 形（-Xeŋe/ -Xaquŋe）、ゼロ形（-Xe/ -Xaqu）という三つの形式が存在するが、そのうち名詞修飾が可能なのはゼロ形のみである[2]。

表 1：シベ語動詞完了形の三形式（肯定形／否定形）

	i 形	ŋe 形	ゼロ形
完了 （-Xe, -Xaqu）	-Xei / -Xaqui	-Xeŋe/ -Xaquŋe	-Xe/ -Xaqu

本論文では、なぜ動詞完了形の三つの形式のうち、ゼロ形のみが名詞修飾が可能であるのかという問題を、三形式が主節の述部に現れた場合の機能の差異を手掛かりにして論じ、結論として、i 形と ŋe 形は話し手と聞き手が持つ知識の集合（本論文では以下、個々の言語主体が持つ知識の集合を、その個人の知識データベースと呼ぶ）への情報の書き込みや、そこからの知識の取り出しという操作を表すのに対し、ゼロ形はそのような操作を表さないこと、そして、このような知識データベースへの操作は、より独立した文に近い主節や

[1]本論文は日本学術振興会特別研究員奨励費「中国西北部諸言語の記述・対照研究―話し手・聞き手の関わりから見た文法現象の諸相（課題番号 11J03594）」による研究成果である。本論文の執筆にあたり、査読者の方々から多くの貴重なコメントを頂いた。ここに記して感謝を表したい。

シベ語は中国・新疆ウイグル自治区で話される満洲・ツングース系の言語である。本論文で使用するデータは 1943 年生の新疆ウイグル自治区チャプチャルシボ自治県第 4 ニル出身のコンサルタントから得られたものである。本論におけるシベ語の表記は久保ほか（2011）に倣い以下の音素表記を用いる：子音/p, t, c, k, q, b, d, j, g, ɢ, f, s, š, x, χ, ž, m, n, ŋ, N, r, w, y, l/、母音/a, e, i, o, u/。/X/と/K/はそれぞれ/x/と/χ/, /k/と/q/の対立が中和した原音素を表す。また、/’/は有標のアクセントを、/ →, ↑ /は有標のイントネーション（それぞれ中平（Mid）と上昇（Rising））を表す。#は漢語要素の音節境界を表す。なお、- と = はそれぞれ接辞の境界と、接語（clitic）の境界を表す。

略号：IRR: 非現実、PFV: 完了（PERFECTIVE）、IMPFV: 未完了（IMPERFECTIVE）、NEG: 否定、I: i 形、ƝE: ŋe 形、IMP: 命令、CVB: 副動詞、COND: 条件、CAUS: 使役、1: 1 人称、2: 2 人称、3: 3 人称、SG: 単数、PL: 複数、GEN: 主格、DAT: 与格、ACC: 対格、INST: 道具格、ALL: 方向格、ABL: 奪格、ON: 序数、COMP: 補文標識、PTCL: 文末詞、INTJ: 間投詞、[F]: 下降イントネーション、[M]: 中平イントネーション、[R]: 上昇イントネーション。なお、グロスで<>で囲まれているのは漢語の要素である。

[2] シベ語は非現実（irrealis）、（現実）未完了（(realis) imperfective）、（現実）完了（(realis) perfective）のアスペクト対立を持ち（児倉 2010）、表中の三形式の対立は非現実や（現実）未完了にも見られる。そのため、より正確には -Xei / -Xaqui を「完了 i 形」、-Xeŋe/ -Xaquŋe を「完了 ŋe 形」、-Xe/-Xaqu を「完了ゼロ形」と呼ぶべきであるが、本論文では以降（現実）完了のみを扱うため、それぞれを簡略的に「i 形」、「ŋe 形」、「ゼロ形」と呼ぶ。

名詞節という単位で行われ、連体節や副詞節という単位では行われないために、ゼロ形のみが連体節に現れることが可能であることを主張する。

1.1. 本論文で扱う形式

本節ではまず、動詞完了形の三形式の特徴を形態統語的な面から概観する。

1.1.1. i 形

i 形は完了アスペクト接辞 -Xe に接辞 -i が後続した形式と分析される。主節の述部がとる形式のうち、最も頻度が高いものである。専ら主節の述部にのみ現れ、他の位置には現れない。

(1) bi Gulja=de siwe' gisuN **taci-Xe-i**.
1SG 地名=DAT シベ語 学ぶ-PFV-I

＜私はグルジャでシベ語を勉強した＞

1.1.2. ŋe 形

ŋe 形は完了アスペクト接辞 -Xe に接語 =ŋe が後続した形式と分析される。i 形と同様、主節の述部に現れることも可能であるが、ŋe 形はさらに名詞節にも現れ、格接辞が後続することが可能である。

(2) bi jaquN biya=i jaqu=de, jaqu=ci yeneŋe=deri'
1SG 8 月=GEN 8=DAT 8=ON 日=ABL

gya-maqe oriNju' sideN=de bei#jiŋe=de **gene-Xe=ŋe.**
得る-CVB 22 まで=DAT <北京>=DAT 行く-PFV=ᴅE

＜私は 8 月の 8 日に、8 日から 22 日まで北京に行った＞

(3) tere miN siN#jaŋe=de **gene-Xe=ŋe**=we
3SG 1SG.GEN <新疆>=DAT 行く-PFV=ᴅE =ACC

dyoNji-Xaqu-i.
聞く-PFV.NEG-I

＜彼は私が新疆に行ったことを聞いていない＞

1.1.3. ゼロ形

ゼロ形は完了アスペクト接辞-Xe になにも後続しない形式と分析される。ŋe 形と同様、主節の述部や名詞節に現れるが、更に連体節にも現れるのが i 形と ŋe 形にない特徴である。

(4) sejeN **ji-Xe**.
車 来る-PFV

＜車が来た＞

(5) miN age’ tere=i xexe **gya-Xe=we**
1SG.GEN **兄** 3SG=GEN **妻** **得る**-PFV=ACC

kenxuNje-maχe-i.
疑う-IMPFV-I

＜私の兄は彼が妻を得た（結婚した）ことを疑っている＞

(6) temaqeN **ji-Xe** nane da miN taci’si.
さっき **来る**-PFV **人** **すなわち** 1SG.GEN **学生**

＜さっき来た人が私の学生だ＞

以上、三形式の特徴を主に形態統語的な面から概観した。ここで、各形式が主節の述部に現れる場合の用法を「述語用法」、名詞節に現れる場合の用法を「名詞節用法」、連体節に現れる場合の用法を「連体用法」としてまとめると以下の表 2 のようになる。表 2 のように、三形式の用法として共通しているのは述語用法のみである。

表 2：動詞完了アスペクトの三形式の用法の比較

	i 形（-Xei）	ŋe 形（-Xeŋe）	ゼロ形（-Xe）
述語用法	○	○	○
名詞節用法	×	○	○
連体用法	×	×	○

1.2. 完了形三形式の用法の位置付け

本論文で扱う、動詞完了形における i 形、ŋe 形、ゼロ形という三形式の対立は代表的な先行研究である李樹蘭ほか（1984、1986）においても認められている。李ほか（1984、1986）では、完了形の「陳述形式」として-χəi、-χəŋ、-χə[3]という三つの形式が挙げられているが、これらは本論文の表記ではそれぞれ-Xei、-Xeŋe、-Xe となる。

しかしながら、李ほか（1984、1986）は、これらの三つの形式の他に、更に名詞修飾の機能を持つ「形動形式」として完了の-x[4]という形式と、名詞と同様に格接辞をとりうる「動名形式」として「形動形式＋-ŋ[5]」という形式（完了形は直接には挙げられていないが-χə-ŋ と考えられる）を認めている。

[3] 李ほか（1984、1986）では-χəi、-χəŋ、-χə はそれぞれ-χəi/ -xəi/ -χui/ -xui、-χəŋ/ -xəŋ/ -χuŋ/ -xuŋ、-χə/ -xə/ -χu/ -xu と表記されているが、これらの表記は本論文の表記では-Xei、-Xeŋe、-Xe の 3 つにまとめられる。本論の表記が基づいているシベ語の音韻体系の詳細は久保ほか（2011）、Kubo（2008）を参照されたい。

[4] 李ほか（1984、1986）では -x/ -χ/ -k と表記されているが、本論の表記では-Xe/ -Ke となる。完了アスペクト接辞はごく一部の動詞語幹に後続する場合に-Ke という形式をとる。

[5] -ŋ（本論の表記では ŋe となる）は名詞にも後続して「～のある」という名詞を派生できる（例：gewe- ＜名前＞＋=ŋe → gewe=ŋe ＜有名な＞）。このことから、動詞の接辞というよりも接語に相当すると考えられる。なお、後に出てくる-Xe-i における-i は名詞に後続しないため、動詞の接辞（-i）であると考えられる。

李ほか（1984、1986）の記述によれば、「陳述形式」の-χə と「形動形式」の-x、「陳述形式」の-χəŋ と「動名形式」の-χə-ŋ は全て異なる形式であるということになる。しかし、「陳述形式」の-χəŋ と「動名形式」の-χə-ŋ についていえば、なぜ「動名形式」の-χə-ŋ のみを-χə と-ŋ に分析し、「陳述形式」の-χəŋ を分析しないのか、という点が問題となる。また、「陳述形式」の-χə と「形動形式」の-x についていえば、「陳述形式」であれ、「形動形式」であれ、母音の音価が認められる-χə と、母音の音価が認められない-x の両方の形式が観察され、両者は音韻的には区別されないという点が問題となる。

そこで本論文では、1.1.で述べたように、李ほか（1984、1986）における「陳述形式」の-χə と「形動形式」の-x を同一の形式-Xe（ゼロ形）とし、「陳述形式」の-χəŋ と「動名形式」の-χə-ŋ も同一の形式-Xe= ŋe（ŋe 形）として扱う。そしてその上で、-Xe と-Xe=ŋe のそれぞれについて主節の述部に現れる場合（李ほか（1984、1986）の「陳述形式」の場合に相当）と連体節や名詞節に現れる場合（同じく「形動形式」や「動名形式」の場合に相当）の機能を統一的に論じることとする。なお、李ほか（1984、1986）における-χəi（本論の表記では-Xei にあたる）は、完了アスペクト接辞-Xe に接尾辞-i が後続した-Xe-i（i 形）として扱う。

また、本論文の分析によれば、表 2 にあるように、-Xe-i、-Xe=ŋe、-Xe のうち -Xe のみが連体節に現れることが可能であるという特徴を持つことになるが、本論文では、このような出現可能な統語的環境の差異について、述語用法における差異からの説明を試みる。

1.3. 「知識データベースへの操作」について

本論文では、動詞完了形の三形式の機能を話し手と聞き手の知識データベースへの操作という観点から論じるが、言語主体が行っている脳の記憶領域への情報の書き込みや既に書き込まれた情報の読み出し、といった心的なプロセスとの対応から文の機能を論じた研究として Chafe（1973、1994）や、田窪（1995）、齊藤（2006）等が挙げられる。Chafe（1973）は、英語について、短期記憶領域と長期記憶領域という二つの記憶領域を想定し、情報が言語主体の記憶領域のどの部分に存在するかという観点から文形式の差異を論じている。そしてそれを受けた Chafe（1994）では談話における言語情報処理の心的プロセスを総合的に論じている。田窪（1995）は日本語の感動詞や文末詞等を言語主体が行う情報の管理操作の心的プロセスのモニタ標識として見ることにより、その機能を明確にすることを提案している。齊藤（2006）は、言語主体の記憶領域と、情報管理操作を行う領域を「知識データベース」としてモデル化し、日本語の「ようだ」、「らしい」という証拠推量表現の機能を知識データベースの操作に関わる心的プロセスの観点から論じている。

本論文ではこれらの先行研究のうち、特に齊藤（2006）に基づき、言語主体の記憶領域と、情報管理操作を行う領域を想定し、それを「知識データベース」と呼ぶ。そして、三つの完了形-Xei、-Xeŋe、-Xe の機能を知識データベースに対する新規の情報の書き込みや、知識データベースに存在する知識の読み出しという心的なプロセスとの対応関係から論じる。

2. 述語用法における完了形三形式の機能

本節では完了形の三形式の機能を述語用法の場合について見る。まず i 形の-Xei とゼロ形の-Xe を比較したのち、ŋe 形の-Xeŋe について見る。

2.1. i 形（-Xei）とゼロ形（-Xe）

2.1.1. 平叙文における使用

i 形の-Xei とゼロ形の-Xe は 1.1.で見た通り共に主節の述部に現れることが可能であり、このとき、特に状況を設定しなければ、文の他の部分の構造を変化させることなく、入れ替え可能である場合がある。

(7) a. sejeN ji-Xe.
車 来る-PFV

＜車が来た＞ =(4)

b. sejeN ji-Xe-i.
車 来る-PFV-I

＜同上＞

しかしながら､i 形とゼロ形は状況を限定することにより許容度に差が生じる場合がある。まず、独り言ではゼロ形の許容度が i 形よりも高いが、反対に呼びかけが入り、明確に他者に対する発話となると i 形の許容度がゼロ形よりも高くなる。

(8) （話し手は一人でテレビを見ている）
liN#ši#fu [yawe-Xe / ??yawe-Xe-i].
<林シェフ> [去る-PFV / 去る-PFV-I]

＜林シェフが行ってしまった＞

(9) a. （話し手は裁縫をしている。脇には児倉がいる）
[waje-Xe / ?waje-Xe-i].
[終わる-PFV / 終わる-PFV-I]

＜終わった＞

b. （話し手は脇にいる児倉に向かって話しかける）
[??waje-Xe / waje-Xe-i] ele#tsaŋe.
[終わる-PFV / 終わる-PFV-I] <[人名]>

＜終わったよ、児倉くん＞

また、聞き手に情報を与える、という状況においても i 形の許容度がゼロ形よりも高い。

(10) a. （A と B は 2 人でバスを待っている）

A: sejeN [ji-Xe / ji-Xe-i].
車 [来る-PFV / 来る-PFV-I]

＜バスが来た＞

b. （A と B は 2 人でバスを待っているが、B は脇の店に入っている）

A: oi χududuN ju, sejeN [??ji-Xe / ji-Xe-i].
INTJ 速く 来る.IMP 車 [来る-PFV / 来る-PFV-I]

＜おい、はやく来い、バスが来たぞ＞

疑問文に対する応答文も、独り言の場合と比べると i 形の許容度がゼロ形よりも高い。

(11) a. （A は一人自室で宿題をやり終えた）

[waje-Xe / ?waje-Xe-i].
[終わる-PFV / 終わる-PFV-I]

＜終わった＞

b. （A が自室から出ると、B（A の母）がいた）

B: zo#ye are-me waje-Xe-i na.
<宿題> する-CVB 終わる-PFV-I 疑問

＜宿題やり終わった？＞

A: [??waje-Xe / waje-Xei].
[終わる-PFV / 終わる-PFV.I]

＜終わった＞

他の発話参与者の知識を否定する、という状況においても i 形の許容度がゼロ形よりも高くなる。

(12) （教室で生徒 A と B が喧嘩をした。そこへ教師 C が来て事情を尋ねる）

C: we neneme taNde-Xe-i.
誰 先に 叩く-PFV-I

＜誰が先に叩いたの？＞

A: tere neneme taNde-Xe-i.
3SG 先に 叩く-PFV-I

＜彼（=B）が先に叩いた＞

B: waqe, tere neneme [taNde-Xe-i / ??taNde-Xe].
ちがう 3SG 先に [叩く-PFV-I / 叩く-PFV]

＜違う、彼（=A）が先に叩いた＞

また、情報伝達を表す動詞と、情報伝達でなく心理状態や思考を表す動詞の補文では、i 形とゼロ形の許容度に差が見られる。補文は前者であれば発話の内容、後者であれば思考の内容を表すと考えられるが、i 形は情報伝達を表す動詞の補文で許容度が高く、ゼロ形は情報伝達でなく心理状態や思考を表す動詞の補文で許容度が高い。

(13) a. （「告げる」：情報伝達を表す）

bi	tere=de	sejeN	[??ji-Xe	/ ji-Xe-i]	seme	ale-Xe-i.
1SG	3SG=DAT	車	[来る-PFV	/ 来る-PFV-I]	COMP	告げる-PFV-I

＜私は彼に「車が来た」と告げた＞

b. （「怖がる」：心理状態を表す）

tere	jiŋe#ca	[ji-Xe	/ ??ji-Xe-i]	seme	gele-maχe-i.
3SG	<警察>	[来る-PFV	/ 来る-PFV-I]	COMP	怖がる-IMPFV-I

＜彼は「警察が来た」と怖がっている＞

(14) a. （「告げる」：情報伝達を表す）

tere	jiχa	bu=qu	da	[??yawe-Xe	/ yawe-Xe-i]
3SG	金	やる=IRR.NEG	すなわち	[去る-PFV	/ 去る-PFV-I]

seme	ale-Xe-i.
COMP	告げる-PFV-I

＜あいつ、金を寄越さずに行った（万引きした）と告げた＞

b. （「怒る」：心理状態を表す）

tere	jiχa	bu=qu	da	[yawe-Xe	/ ??yawe-Xe-i]
3SG	金	やる=IRR.NEG	すなわち	[去る-PFV	/ 去る-PFV-I]

seme	faNce-maχe-i.
COMP	怒る-IMPFV-I

＜あいつ、金を寄越さずに行った（万引きした）と怒っている＞

これらの例から、ゼロ形と i 形の差異は、i 形が情報伝達の機能を持つのに対し、ゼロ形は情報伝達の機能を持たず、専ら言語主体（通常は話し手自身だが、補文に現れた場合は主節の主語となる）の心理状態や思考の描写に用いられるという、情報伝達の機能を持つか否かによるものと考えられる。

2.1.2. 疑問文における使用

シベ語において疑問文は真偽疑問文と疑問詞疑問文に分類される。疑問文を形式の面から見ると、真偽疑問文は平叙文＋文末詞 na という構造をとるが、疑問詞疑問文では文末に特定の文末詞が現れない。真偽疑問文と疑問詞疑問文も平叙文と同様、動詞はゼロ形と i 形が区別される。

(15) a. tere ji-Xe na.
3SG 来る-PFV PTCL
＜彼（女）、来た？＞

b. tere ji-Xe-i na.
3SG 来る-PFV-I PTCL
＜同左＞

(16) a. si awi=de gene-Xe.
2SG どこ=DAT 行く-PFV
＜お前どこに行った？＞

b. si awi=de gene-Xe-i.
2SG どこ=DAT 行く-PFV-I
＜同左＞

疑問文におけるゼロ形とi形の差異を見るために、疑問文をさらに機能の面から見ておきたい。疑問文を機能の面から、典型的には「当該の命題を知識として持たない話し手」から、「当該の命題を知識として持つ（と話し手が予測する）聞き手」に対して情報要求のために発話される文であるとすると、この典型から外れるものとして、話し手が既に当該の命題についての知識を持っているにも拘わらず聞き手に対して情報を要求する「確認」の文や、「クイズ」の文などが想定される。しかし、このような「確認」や「クイズ」の文も、話し手が自身のもつ知識をより確かなものにするためや、応答により聞き手が当該の知識を持っているかどうかを確認するための情報を要求しているという点では典型的な疑問文と共通している。シベ語では、以下のように「確認」(17)や「クイズ」(18)の文ではi形の許容度がゼロ形よりも高くなる。

(17) （部屋に入ってきた聞き手に対し）
si ji-Xe-i na.
2SG 来る-PFV-I PTCL
＜おまえ、来た？＞

(18) tulbi-meta. bi eneŋe ai baite
予測する-CVB 見る.IMP 1SG 今日 なに 事
[??are-Xe / are-Xe-i].
[する-PFV / する-PFV-I]
＜当ててみて！私は今日なにをしたでしょう？＞

これに対し、以下の(19)のような「反語」の文では、反対にゼロ形の許容度がi形よりも高くなる。

(19) si awi=de [gene-Xe / ??gene-Xe-i] teraŋe ba=de
2SG どこ=DAT [行く-PFV / 行く-PFV-I] そんな 場所=DAT
gene-me oju=qu.
行く-CVB なる=IRR.NEG
＜お前なんてところに行ったんだ。そんなところに行っちゃいけない＞

(20) tere gele [ji-Xe / ?ji-Xei] na.
3SG **また** [**来る**-PFV / **来る**-PFV-I] PTCL
＜彼、また来たの？＞

「反語」の文は、先に見た典型的な疑問文に対して、「形式の面から見ると疑問文であるにも拘わらず、情報要求のためには発話されていない文」であると言える。ある文が情報要求を表すか否か（あるいは反語文であるか否か）は、平叙文の場合と並行して、情報要求を表す動詞とそうでない動詞の補文に入ることが可能か否かということから示される。情報要求を表す動詞 fyoNji-「尋ねる」と、そうでない動詞 to-「叱る」は、共に補文に形式としての疑問文をとることが可能であるが、fyoNji-「尋ねる」の補文では i 形の許容度が高いのに対し、to-「叱る」の補文では反対にゼロ形の許容度が高くなる。

(21) a. ya=de te-maqe [??seNda-Xe / seNda-Xe-i] seme
どこ=DAT **座る**-CVB [**～してしまう**-PFV / **～してしまう**-PFV-I] COMP
fyoNji-Xe-i.
尋ねる-PFV-I
＜どこに座ってしまったのか、と尋ねた＞

b. ya=de te-maqe [seNda-Xe / ?seNda-Xe-i] seme
どこ=DAT **座る**-CVB [**～してしまう**-PFV / **～してしまう**-PFV-I] COMP
to-Xe-i.
叱る-PFV-I
＜どこに座ってしまったのだ、と叱った＞

(21)から分かるように、i 形の疑問文は情報要求の機能を持つのに対し、ゼロ形の疑問文は形式から見ると疑問文と言えるにも拘わらず、情報要求の機能を持たない。

以上、本節では、i 形とゼロ形の機能を平叙文と疑問文に分けて見てきた。結論として、i 形は平叙文では情報伝達の機能を持ち、疑問文では情報要求の機能を持つのに対し、ゼロ形は、平叙文では情報伝達の機能を持たず、疑問文でも情報要求の機能を持たないということが言える。

2.2. ŋe 形（-Xeŋe）

次に、2.1.での i 形とゼロ形の比較を踏まえ、ŋe 形の-Xeŋe の機能を見る。まず、ŋe 形も疑問文に対する応答文として使用が可能であり、この点でゼロ形よりも i 形に近いことが分かる。

(22) A: duliNkyaN sewe=i baNji-Xe yeneŋe=we sina=maqe
去年 **先生**=GEN **生まれる**-PFV **日**=ACC [**人名**]=INST

embade dulu-we-Xe-i na.
一緒に 過ぎる-CAUS-PFV-I PTCL

＜去年、先生の誕生日はシナと一緒に過ごしましたか？＞

B: ŋe, [dulu-we-Xe-i / dulu-we-Xe=ŋe].
INTJ [過ぎる-CAUS-PFV-I / 過ぎる-CAUS-PFV=ᵑᴰE]

＜はい、過ごしました＞

しかし、i 形と異なり、話し手自身が発話時まで知らなかった（あるいは発話時に忘れていた）情報を表す場合 ŋe 形は許容されない。このことから、ŋe 形の表す情報は i 形の表す情報と異なり、発話時において話し手が既に知っている（あるいは発話時に覚えている）必要があるといえる。

(23) A: dule-Xe baruN=i ujui yeneŋe ya=de
過ぎる-PFV 週=GEN 1 番目の 日=DAT どこ=DAT

[gene-Xe-i / gene-Xe=ŋe].
[行く-PFV-I / 行く-PFV=ᵑᴰE]

＜先週の月曜日にどこに行った？＞
（B は忘れたので手帳を見る）

B: ye#ywaN=de [gene-Xe-i / ??gene-Xe=ŋe].
<病院>=DAT [行く-PFV-I / 行く-PFV=ᵑᴰE]

＜病院に行った＞

疑問文では、平叙文の場合とは反対に、（疑問文の）話し手が発話時において既に知っている情報を要求するのに ŋe 形は許容されない。具体的には、(24)や(25)のように話し手が発話の状況から知ったり、推論した情報を確認する場合、あるいは(26)のように話し手が既に知っている情報をクイズとして尋ねる場合には ŋe 形は許容されない。

(24) （児倉がコンサルタントの家に入るとコンサルタントが）
ele#tsaŋe si [ji-Xe-i / ??ji-Xe=ŋe] na.
<児倉> 2SG [来る-PFV-I / 来る-PFV=ᵑᴰE] PTCL

＜児倉くん、君来たの？＞

(25) （酒の臭いをプンプンさせて帰ってきた夫に対して妻が）
si arki [ami-Xe-i / ??ami-Xe=ŋe] na.
2SG 酒 [飲む-PFV-I / 飲む-PFV=ᵑᴰE] PTCL

＜あなた、お酒のんだの？＞

(26) tulbi-me ta, miN fei#ji pyau=i eriN=we=ni'
推測する-CVB **見る**.IMP 1SG.GEN **<飛行機>** **<切符>**=GEN **時間**=ACC=TOP

χulyasi-me [mutu-Xe-i / ??mutu-Xe=ŋe] na.
交換する-CVB [**できる**-PFV-I / **できる**-PFV=ƆE] PTCL

＜当ててみて、私の飛行機のチケットの（フライトの）時間を変えることができたでしょうか？＞

以上のことから、ŋe 形は平叙文では発話時において話し手が既に知っている（または発話時において覚えている）情報を表し、疑問文においては（疑問文の）話し手が知らない情報を表すといえるが、この形式は談話において、推論のために必要な知識の伝達と要求に関わると見られる。以下の(27)では、話し手が必要な情報は「ナン（ウイグル等の民族が食べるパンの一種）を買う必要があるかどうか」であり、それを判断するために B が既にナンを買ったかどうかという情報を要求している。A は B の提供する情報に基づき、B がナンを買っていた場合は既に家にナンがあるのでもう買う必要がない、というように推論に基づいた判断を行う。

(27) （A と B は家族同士である）

A: eneŋe laŋe=eweN [gya-Xe=ŋe / ??gya-Xe-i[6]] na.
今日 **ナン** [**買う**-PFV=ƆE / **買う**-PFV-I] PTCL

＜今日ナン買ったか？＞

B: emgeri' [gya-Xe=ŋe / ??gya-Xe-i].
既に [**買う**-PFV=ƆE / **買う**-PFV-I]

＜もう買ったよ＞

A: tutu o-ci da gya=qu o-Xe.
そのように **なる**-COND **すなわち** **買う**=IRR.NEG **なる**-PFV

＜それなら買わない＞

3. 述語用法における機能の統一的分析—イントネーションとの関わりから

3.1.「知識データベースに対する操作」による分析

2 節では、シベ語の完了形がとる三形式、i 形、ŋe 形、ゼロ形の機能を平叙文の場合と疑問文の場合に分けて論じたが、ここで平叙文と疑問文の両者における機能の統一的な分析を試みる。

まず問題となるのは、疑問詞疑問文が平叙文と同じ形式をとる点である。真偽疑問文は(15)などのように、文末詞 na があることにより平叙文と異なる形式となっているが、疑問

[6] i 形の文は、例えば朝買うように頼んでいたナンを買ったかどうかを確認する状況では許容されるが、(27)の状況では、話し手が知りたいのは聞き手がナンを買ったかどうか自体ではなく、ナンを買う必要があるか否かであるため、i 形の許容度が低くなる。

詞疑問文は文末に疑問を表す文末詞が現れず、平叙文と同一の分節的形式をとる[7]。

(28) a. si eneŋe ai baite are-Xe-i →.
2SG 今日 なに 事 する-PFV-I [M]

＜今日は何をした？＞

b. siwe' gisuN taci-Xe-i.
シベ 語 学ぶ-PFV-I

＜シベ語を勉強した＞

このことは、i 形の機能を、平叙文を基にした情報伝達も、疑問文を基にした情報要求も i 形の統一的な機能とすることができないことを示している。本論文では、この問題を踏まえて、文が話し手と聞き手の知識データベースに対する操作を表す、と仮定して、i 形、ŋe 形、ゼロ形の機能を論じる。この仮定に立つと、三形式の機能は仮に平叙文を基にして以下のように規定できる。

・i 形は(9)、(10)、(11)、(12)のように聞き手に対する情報伝達だけでなく、(23)のように、話し手自身が忘れていた情報も表すことができることから、話し手または聞き手の知識データベースに対する新規情報の書き込みという操作を表す[8]。

・ŋe 形は i 形と異なり、平叙文では話し手の知っている知識にのみ用いられること、また、談話において推論の前提となる情報を伝達する点で i 形とは異なり、話し手の知識データベースからの知識の読み出しという操作を表す。

・ゼロ形は情報伝達や情報要求の機能を持たないことから、知識データベースに対する操作を表さない。

以下では、この仮説について、文が知識データベースに対する操作を表すという仮定の妥当性と、疑問文の場合にも成り立つか否かという二点から検討する。なお、既に(23a)にあるように、疑問詞疑問文は平叙文と異なるイントネーションをとるが、特に疑問詞疑問文における三形式の機能を論じる際にはこのイントネーションが重要となるため、以下では文のとるイントネーションから上記の仮説について論じていく。

3.2. 文の機能とイントネーションの関わり

Kubo（2011）、久保ほか（2011）によれば、シベ語では下降（Falling）イントネーション、中平（Mid）イントネーション、上昇（Rising）という三種類のイントネーションが対立する。このうち、上昇イントネーションは従属節末や疑問文に現れるものであり、平叙文の主節末や命令文では、主に下降（Falling）イントネーションと中平（Mid）イントネー

[7] (28a)に表記されているように、疑問詞疑問文は平叙文と異なるイントネーションをとるが、これについては 3.3.で論じる。

[8] より正確にいえば、他者の知識データベースに対して直接操作を行うことは不可能である（例えば、他者の記憶を思い出すというのは不可能である）ことから聞き手の知識データベースに対する操作というのは、実際には聞き手が自身の知識データベースを操作するような、聞き手に対する働きかけであると考えられる。

ションが現れる。以下の例文ではイントネーションを表記しているが、このうち、下降イントネーションは無標と考えられるため、以下ではグロスにのみ表記している。

(29) a. bi yawe-mi.
1SG 去る-IRR.I [F]
＜私は去る＞

b. bi yawe-mi →.
1SG 去る-IRR.I [M]
＜同左＞

(30) a. yawe.
去る.IMP [F]
＜去れ＞

b. yawe →.
去る.IMP [M]
＜同左＞

これらのイントネーションは文の形式から完全に独立しているわけではなく、2 節で見た完了の三形式は、それぞれとりやすいイントネーションの種類が異なり、平叙文では i 形と ŋe 形が下降イントネーションで現れやすいのに対し、ゼロ形のみは中平イントネーションで現れやすい。例えば、例文(7)は、イントネーションを表記すると一般に以下(31)のようになる。

(31) a. sejeN ji-Xe →.
車 来る-PFV [M]
＜車が来た＞

b. sejeN ji-Xe-i.
車 来る-PFV-I [F]
＜同左＞ (=(7))

また、別の状況において ŋe 形が用いられる以下の例文(32)は、(31b)と同様、下降イントネーションで現れやすい。

(32) （車が去ってしまった後に）
sejeN ji-Xe=ŋe.
車 来る-PFV=ŋE [F]
＜車が来た＞

この現象は、3.1.で論じた、知識データベースに対する操作の有無、という文の機能により説明が可能になる。3.1.では、i 形、ŋe 形が知識データベースへの操作に対応するのに対し、ゼロ形のみはそのような操作に対応しないと述べたが、(31)と(32)に見られる、ゼロ形のみが異なるイントネーションをとるという現象は、知識データベースに対する操作の有無と並行している。

3.3. 疑問文におけると知識データベースの操作

3.2.では、平叙文について完了の三形式とイントネーションとの対応関係を見たが、本節では疑問文について見る。まず疑問詞疑問文について見ると、2.1.2.で見たように、疑問詞疑問文は文末に疑問を表す文末詞をとらず、この点で平叙文と形式の面で共通している。

しかしながらイントネーションを見ると、疑問詞疑問文は動詞がゼロ形の場合だけでなく、i 形、ŋe 形の場合でも中平のイントネーションをとり、特に i 形と ŋe 形は平叙文と疑問文でイントネーションが異なることになる。

(33) si ya=de [te-Xe / te-Xe-i / te-Xe=ŋe] →.
2SG どこ=DAT [座る-PFV / 座る-PFV-I / 座る-PFV=ɲE] [M]
＜お前、どこに座った？＞

この現象も、平叙文の場合と同様に知識データベースに対する操作との対応関係から考えることにする。3.1.と 3.2.で述べたように、中平のイントネーションをとるゼロ形の平叙文は、知識データベースに対する操作がない文であると考えられるが、(33)では、知識データベースに対する操作があるはずの i 形と ŋe 形も中平のイントネーションをとっており、文の形式とイントネーションが対応しないことになる。しかし、この問題は、疑問詞疑問文では、知識データベースに対する操作が留保されていると仮定することによって解決される。つまり、(33)において動詞が i 形の場合は、話し手自身の知識データベースへの「聞き手が X に座った」という情報の書き込みが留保されていると考えれば、文が知識 DB への操作のない平叙文のゼロ形と同じ中平のイントネーションをとることが説明できる[9]。

真偽疑問文は、決まったイントネーションをとらず、上昇、中平、下降のイントネーション全てをとりうる。真偽疑問文の場合は、知識データベースへの操作の留保が文末詞の na によって表されていると考えられ、イントネーションは特に上昇のイントネーションにより聞き手への知識の要求が明示化されていると考えられる。下の(34)では、上昇イントネーションの(34a)は話し手が知らない状況で用いられるのに対し、上昇でないイントネーションの(34b)は確認の状況で用いられやすい。

(34) a. si yawe-mi na ↑ b. si yawe-mi na →
2SG 去る-IRR.I PTCL [R] 2SG 去る-IRR.I PTCL [M]
＜お前、去るか＞ ＜お前、去るか＞

以上、3 節では、ゼロ形、i 形、ŋe 形の機能を知識データベースに対する操作を表すとした上で、疑問文は、知識データベースに対する操作が留保されたものと考えることにより平叙文と疑問文の両方における i 形、ŋe 形、ゼロ形の機能の統一的な説明を試みた。また、文形式とイントネーションとの対応関係から、特に中平イントネーションをとる文が、知識データベースに対する操作がない文であるという仮説を提示した。本論文で提示してきた、言語主体の知識データベースに対する操作という観点からの i 形、ŋe 形、ゼロ形の分析は平叙文と疑問文の機能を統一的に論じることができるだけでなく、文形式とイントネーションの対応関係にも妥当な説明を与えられるものである。

[9] 疑問詞疑問文が持つ情報要求という機能は、疑問詞自体によると考えられる。シベ語において疑問詞は ai →「何？」we →「誰？」のように、一語文の形式でも情報の要求の機能を持ちうるからである。

4. ゼロ形はなぜ連体修飾が可能か？—節の機能の観点から

2 節および 3 節では、i 形、ŋe 形、ゼロ形の三形式の差異を述語用法の場合について、知識データベースへの操作という観点から論じてきた。さて、冒頭に述べたようにこれらの三形式は現れることのできる統語的環境が異なり、特にゼロ形が連体用法を持つことが注目される。本節ではこの差異を 3 節までに論じてきた、知識データベースの操作という観点から考えたい。

4.1. シベ語の動詞述語文における節の構造

まず、シベ語の動詞述語文（平叙文、疑問文）の構造と、従属節の構造について表 3a と表 3b にまとめて示す。表 3a にあるように、平叙文と疑問文では、語幹がヴォイスとアスペクト接辞をとり、その後ろに接辞-i または接語=ŋe が現れ、文末に独立度の高い文末詞 na や推量を表す ba が現れる。これらの要素のうち義務的なのはアスペクト接辞のみであり、接辞・接語をとらないものがゼロ形に相当する。

表 3a：動詞述語文（平叙文、疑問文）の構造

語幹	（ヴォイス）	アスペクト	（接辞・接語）	（文末詞）
V-	-we-	-Xe -maχe -re	-i =ŋe	na ba

一方、表 3b のように条件節など独立度の低い従属節では、動詞は主節に見られるアスペクト接辞や接辞・接語をとらず、文末詞も現れない。

表 3b：従属節の構造

語幹	（ヴォイス）	接辞
V-	-we-	-me -maqe -fe -ci

4.2. 節の種類と節中に出現可能な要素の階層性

4.1.の表 3a で見た動詞述語文[10]の構成要素は、補文、名詞節、連体節といった節の種類により現れることのできる要素に制限が見られる。節の種類と節内に現れることのできる要素は表 4 のようにまとめられ、表 3a で見たような、要素が主節において現れる位置によって階層性が存在することが分かる。

[10] シベ語において命令は動詞語幹そのままの形式で表され、意思や勧誘は動詞語幹＋-ki で表される（例：gene-「行く」：gene「行け」、gene-ki「行こう」）。が、これらの形式は以下で扱う文末詞や、アスペクト、否定、接辞-i、接語=ŋe のいずれとも共起しないため、本論文での考察の対象からは除外する。

表 4：節の種類と節中に出現可能な要素

	アスペクト	否定	ゼロ形[11]	ŋe 形	i 形	文末詞 ba, na
主節	○	○	○	○	○	○
補文	○	○	○	○	○	○
名詞節	○	○	○	○	—	—
連体節	○	○	○	—	—	—
副詞節	△	△	△	—	—	—

以下の(35)から(40)はそれぞれの節の例である。

(35) 主節

tere [ji-Xe / ji-Xe=ŋe / ji-Xei] na.
3SG [来る-PFV / 来る-PFV=ᵑᴳE / 来る-PFV.I] PTCL

「彼、来たか？」

(36) 補文[12]

a. tere ji-Xe na seme fyoNji-Xe-i.
3SG 来る-PFV PTCL COMP 尋ねる-PFV-I

＜彼（女）、来た？と尋ねた＞

b. ya=de te-maqe seNda-Xe-i seme fyoNji-Xe-i.
どこ=DAT 座る-CVB ～してしまう-PFV.I COMP 尋ねる-PFV-I

＜一体どこに座ってしまったのか、と尋ねた＞

c. ya=de te-maqe seNda-Xe=ŋe seme fyoNji-Xe-i.
どこ=DAT 座る-CVB ～してしまう-PFV=ᵑᴳE COMP 尋ねる-PFV-I

＜一体どこに座ってしまったのか、と尋ねた＞

d. ya=de te-maqe seNda-Xe seme to-Xe-i.
どこ=DAT 座る-CVB ～してしまう-PFV COMP 叱る-PFV-I

＜なんというところに座ってしまったのだ、と叱った＞

[11] ここではゼロ形という項目を設けたが、ゼロ形は動詞語幹にアスペクト（と否定）が後続した形式であるため、その分布は「アスペクト」と「否定」の分布に準じることになる。

[12] ここで補文としているものは、引用節としても見ることが可能であり、引用節として見た場合にはより統語的に主節に近いものといえる。同様に、次に取り上げる名詞節も統語的には引用節に近いものである。

(37) 名詞節[13]

a. bi siN ere ani χase'ke gisuN=we
1SG 2SG.GEN この 年 カザフ 語=ACC

[taci-Xe=we / *taci-Xe-i=we] oŋu-Xe-i.
[学ぶ-PFV=ACC / 学ぶ-PFV-I=ACC] 忘れる-PFV-I

＜私はお前が今年カザフ語を勉強したというのを忘れていた＞

b. tere si(N) ere ani χase'ke gisuN=we
3SG 2SG(.GEN) この 年 カザフ 語=ACC

[taci-Xe=ŋe=we / *taci-Xe-i=we] oŋu-Xe-i.
[学ぶ-PFV=ŊE =ACC / 学ぶ-PFV-I=ACC] 忘れる-PFV-I

＜彼はお前が今年カザフ語を勉強したというのを忘れていた＞

(38) 連体節

a. [gene-Xe / gene-Xaqu] nane
[行く-PFV / 行く-PFV.NEG] 人

＜行った／行かなかった人＞

b. [*gene-Xe-i / *gene-Xaqu-i] nane
[行く-PFV-I / 行く-PFV.NEG-I] 人

＜行った／行かなかった人＞

c. [*gene-Xe=ŋe / *gene-Xaqu=ŋe] nane
[行く-PFV=ŊE / 行く-PFV.NEG=ŊE] 人

＜行った／行かなかった人＞

d. [*gene-Xe / *gene-Xaqu] ba nane
[行く-PFV / 行く-PFV.NEG] だろう 人

＜行った／行かなかったであろう人＞

(39) 副詞節

a. sejeN te-maqe ji-Xe-i.
車 乗る-CVB 来る-PFV-I

＜車に乗って来た＞

b. jaqe je-me gene-Xe-i.
もの 食べる-CVB 行く-PFV-I

＜食事をしにいった＞

[13] ゼロ形による名詞節と ŋe 形による名詞節の差異は、話し手が名詞節の内容を知っている（忘れていない）かどうかという点にある。つまり、ゼロ形の(37a)では、名詞節の内容「お前がカザフ語を勉強する（こと）」を話し手が忘れていたのに対し、ŋe 形の(37b)では、話し手は名詞節の内容を知っている（忘れていない）。

副詞節は否定の場合にゼロ形をとる場合があり、この場合にのみアスペクト接辞（ゼロ形）が現れることになる。

(40)　sejeN　te-Xaqu　ji-Xe-i.
　　車　乗る-PFV.NEG　来る-PFV-I
　　＜車に乗らずに来た＞

表 4 から分かるように、i 形、ŋe 形、ゼロ形はそれぞれ現れることのできる節の種類に制限があり、i 形は主節または補文のみ、ŋe 形は主節、補文に加え名詞節にのみ現れ、ゼロ形は主節、補文、名詞節に加え連体節のほか、否定の場合に限り副詞節にも現れることが可能である。そして、特に i 形の現れることのできる統語的位置は文末詞 ba, na と共通していることも分かる。

同様の現象は日本語の文の構造にも見られることが知られている。日本語の文の構造について論じた南（1974）によれば、日本語の従属節において、節内に現れる要素は主節に現れる要素に比べて限定されており、断定や疑問などの意味を持った終助詞は従属節には現れず、それはこれらの要素が最も陳述的な性格を持っていることによる、とされている。本論文ではシベ語の動詞完了形の三形式のうち、i 形と ŋe 形にのみ知識データベースへの操作の機能があること論じたが、仮にこの機能を日本語の文の構造における陳述的機能に相当するものと考えるならば、シベ語の i 形と ŋe 形が生起可能な統語的位置の制限は、文において知識データベースへの操作が可能な単位の制限として捉えることが可能である。つまり、i 形の持つ、知識データベースへの情報の追加は主節に相当する単位で行われ、ŋe 形の持つ知識データベースからの情報の取り出しは名詞節および主節を単位として行われる、ということである。これらに対して、ゼロ形は知識データベースへの操作の機能を持たないために、i 形や ŋe 形に存在する知識データベースの操作の制限を受けないために連体節を含め広い統語的位置に出現可能であると考えられる。

5. まとめ

本論文ではシベ語の動詞完了形の三形式、i 形、ŋe 形およびゼロ形の述語用法における差異を手掛かりに、これらの形式のうちゼロ形のみが連体用法を持つ理由について論じた。本論文の結論は以下のようにまとめられる。

① 主節の述部に現れるゼロ形は、他の形式 i 形、ŋe 形と異なり、話し手と聞き手の持つ知識データベースに対する操作という機能を持っていないといえる。さらに、ゼロ形のみが知識データベースに対する操作という機能を持っていないという分析は、ゼロ形が疑問詞疑問文と同様に主節末において中平のイントネーションをとるという現象を矛盾なく説明することが可能である。

② 三形式が現れることの可能な統語的位置の差異は i 形と ŋe 形の持つ情報のデータベースに対する操作が行われる単位の制限から生じると考えられる。つまり、i 形のもつデータベースへの情報の追加という操作は主節という単位でのみ可能であり、ŋe 形のもつデータベースからの情報の取り出しという操作は主節ないし名詞節という単位でのみ可

能である。このような、節中に現れることが可能な要素の階層性は日本語の節の構造にもみられる。

本論文では扱うことができなかったが、シベ語の他のアスペクト形式（未完了、非現実）も i 形、ŋe 形、ゼロ形に相当する形式を持つものの、未完了のゼロ形と非現実の ŋe 形は述語用法を持たないという特徴がある。今後はこういった形式にも分析の対象を拡大し、シベ語の動詞述語文の構造と機能について包括的な解明を目指す他、さらに、シベ語と同様に述語に現れる形式のうち連体用法を持つものとそうでないものの両方が存在する他の言語についても同様の議論が可能か検討していきたい。

参考文献

Chafe, L. W. (1973) Language and memory. *Language*. Vol. 49. pp. 261-281.

――――― (1994) *Discourse, Conciousness and Time*.The University of Chicago Press: Chicago.

児倉徳和（2010）「シベ語の動詞接尾辞 -mi, -Xei, -mahei について―アスペクトと時間ダイクシスの体系―」『東京大学言語学論集』30 ． 東京大学言語学研究室. pp.93-113.

Kubo, T. (2008) A Sketch of Sibe phonology. 寺村政男・久保智之・福盛貴弘編『言語の研究―ユーラシア諸言語からの視座―』（『語学教育フォーラム』第 16 号）. 大東文化大学. pp. 127-142.

――――― (2011) Sibe intonation. (In.) *Proceedings of the 10th Seoul International Altaic Conference ― Reexaminations of objects and methods of research into the Altaic languages and cultures.* pp. 89-98. The Altaic Society of Korea.

久保智之、児倉徳和、庄声（2011）『シベ語の基礎』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

李樹蘭、仲謙、王慶豊（1984）『錫伯語口語研究』民族出版社：北京.

李樹蘭、仲謙（1986）『錫伯語簡志』民族出版社：北京.

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.

齊藤学（2006）『自然言語の証拠推量表現と知識管理』九州大学博士論文.

田窪行則（1995）「音声言語の言語学的モデルをめざして―音声対話管理標識を中心に―」『情報処理』35. 情報処理学会. pp.1020-26.

The Function of Three Perfective Forms *-Xei*, *-Xeŋe,* *-Xe* and a Clause Hierarchy : Why Only *-Xe* May Occur in Adnominal Clauses?

Norikazu KOGURA
(JSPS research Fellow)

In Sibe, the perfective aspect of verbs may occur in three forms: *-Xei*, *-Xeŋe*, and *-Xe*. Although all of these three forms occur as predicates of main clauses, only *-Xe* may occur in adnominal clauses. This paper attempts to give an explanation for this syntactic peculiarity from the functional characteristics of *-Xe* in main clauses, and argues that, 1) *-Xei* and *-Xeŋe* have some function of knowledge management of the speaker and the hearer, whereas *-Xe* does not. 2) *-Xei* and *-Xeŋe* cannot occur in adnominal clause because knowledge management in discourse is only possible taking more-independent clauses (main clauses, complement clauses and nominal clauses) as a unit and not taking less-independent ones (adnominal clauses and adverbial clauses) as a unit.

（こぐら・のりかず　kogura.norikazu@gmail.com）